

## 乙子神社草庵

どのようなわけか、良寛は12年間住んだ五合庵を捨てて、国上山のふもとにある乙子神社脇の社務所に移った。俗にこれを乙子神社草庵という。移住は文化13年(1816)、59歳の冬ころと思われる。しかし、それ以前から、冬は乙子神社草庵を利用し、夏は山腹の五合庵にいたのかもしれない。

良寛の入った庵は、この頃の社務所兼村人の集会所に使われていたもののようで、当時の建物は、三間四方・畳十八畳の広さで、中央に炉のある部屋と二つの間仕切り部屋があり、板敷きの上に筵を敷いていたらしい。屋根は杉皮葺きで、良寛当時の建物は、明治19年(1886)に建て替えられている。再建された建物も昭和62年(1987)に取り壊されて、現在の建物に建て替えられた。現在の建物は、良寛敬慕者の浄財により、ほぼ良寛当時のものに復元され、訪れる人に往時を偲ばせてくれる。

この乙子神社草庵に入ってから、良寛は本格的に万葉集を読んでいったと思われる。万葉集は、国上集落に近い渡部の庄屋阿部定珍から借用したらしく、定珍とは特に親しく行き来をしていた。以下は二人の唱和の歌

しばらくはここに止まらむ久方の	
後には月のいでむと思へば	定珍
月よみの光を待ちて帰りませ	
君が家路は遠からなくに	良寛
月よみの光を待ちて帰りませ	
山路は毬の落つれば	良寛

昭和27年12月10日 新潟県指定文化財

